

### 4.3 生物多様性

生物多様性とは、多くの種が生息する（種の多様性）ということや、それらが生息・生育することによって形成される生態系の多様性、同じ種であっても個性を未来へと引き継いでいく遺伝子の多様性を総合的に示すものです。ここでは、河口から上流にいたるまで連続的に鳥類の確認種数や生息環境の指標性ごとの確認個体数を整理し、河川ごとの鳥類相の特徴を検討しました。

#### 【鳥類の全流程にわたる種数・個体数の分布状況】

(鳥類調査)

- ・ 北海道の渚滑川、中部地方の豊川、中国地方の芦田川では樹林性指標種、東北地方の最上川、赤川では湖沼静止水面指標種、九州地方の遠賀川では人家周辺指標種の比率の高いスポットが多い

鳥類の1kmピッチの確認種数と生息環境別確認個体数を整理しました。

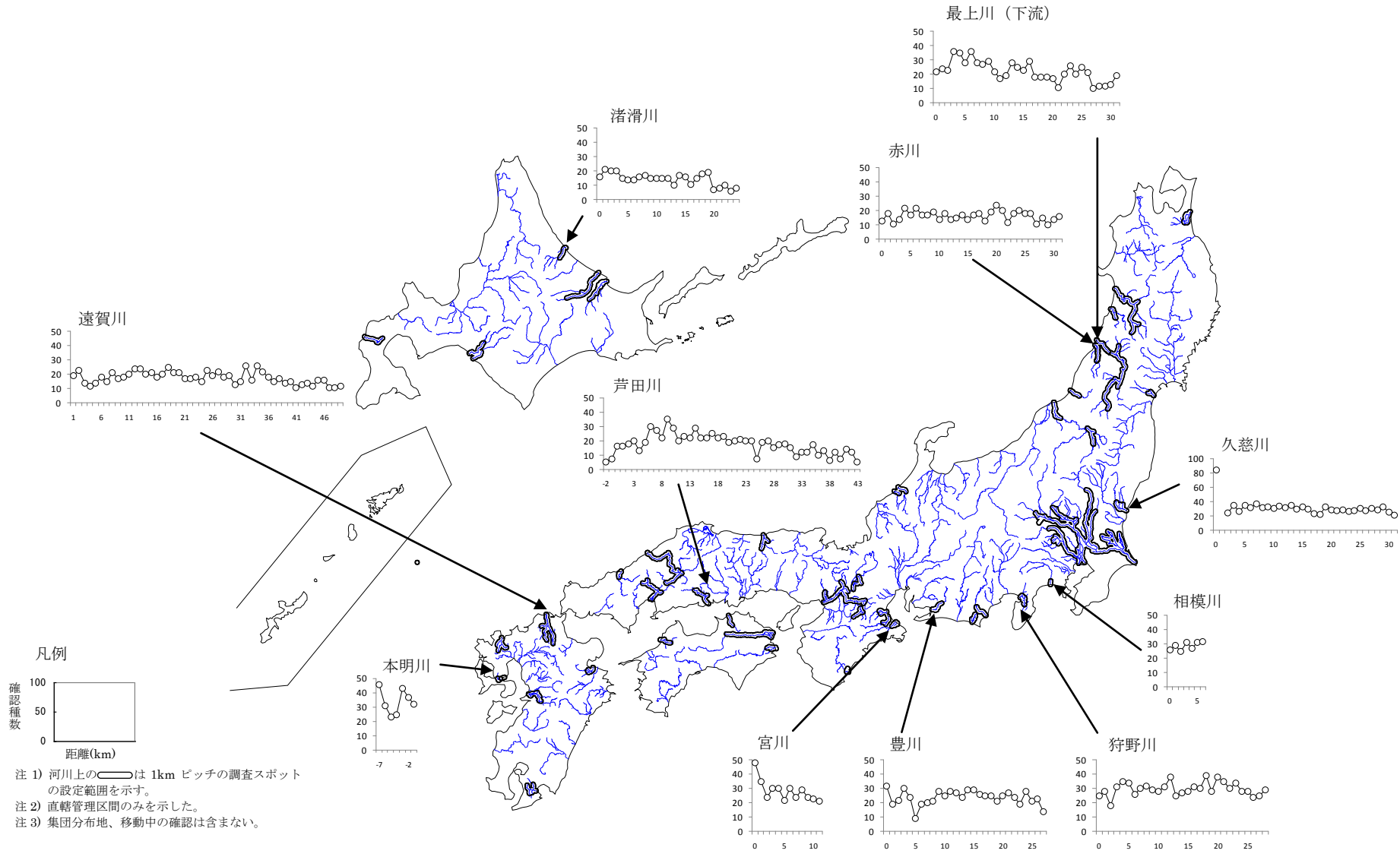
今回とりまとめを行った一級河川11河川では、海岸指標種(海岸を生息環境とする種)や樹林性指標種(樹林を生息環境とする種)、水辺指標種(水辺を生息環境とする種)などの確認状況が、河口から上流にいたるまでの間に刻々と変化していく様子が確認されました。また、北海道の渚滑川、中部地方の豊川、中国地方の芦田川では樹林性指標種、東北地方の最上川、赤川では湖沼静止水面指標種、九州地方の遠賀川では人家周辺指標種の比率が高いスポットが多くみられるなど、それぞれ特徴のある鳥類相であることが示されました。

(資料掲載：4-17～19 ページ)

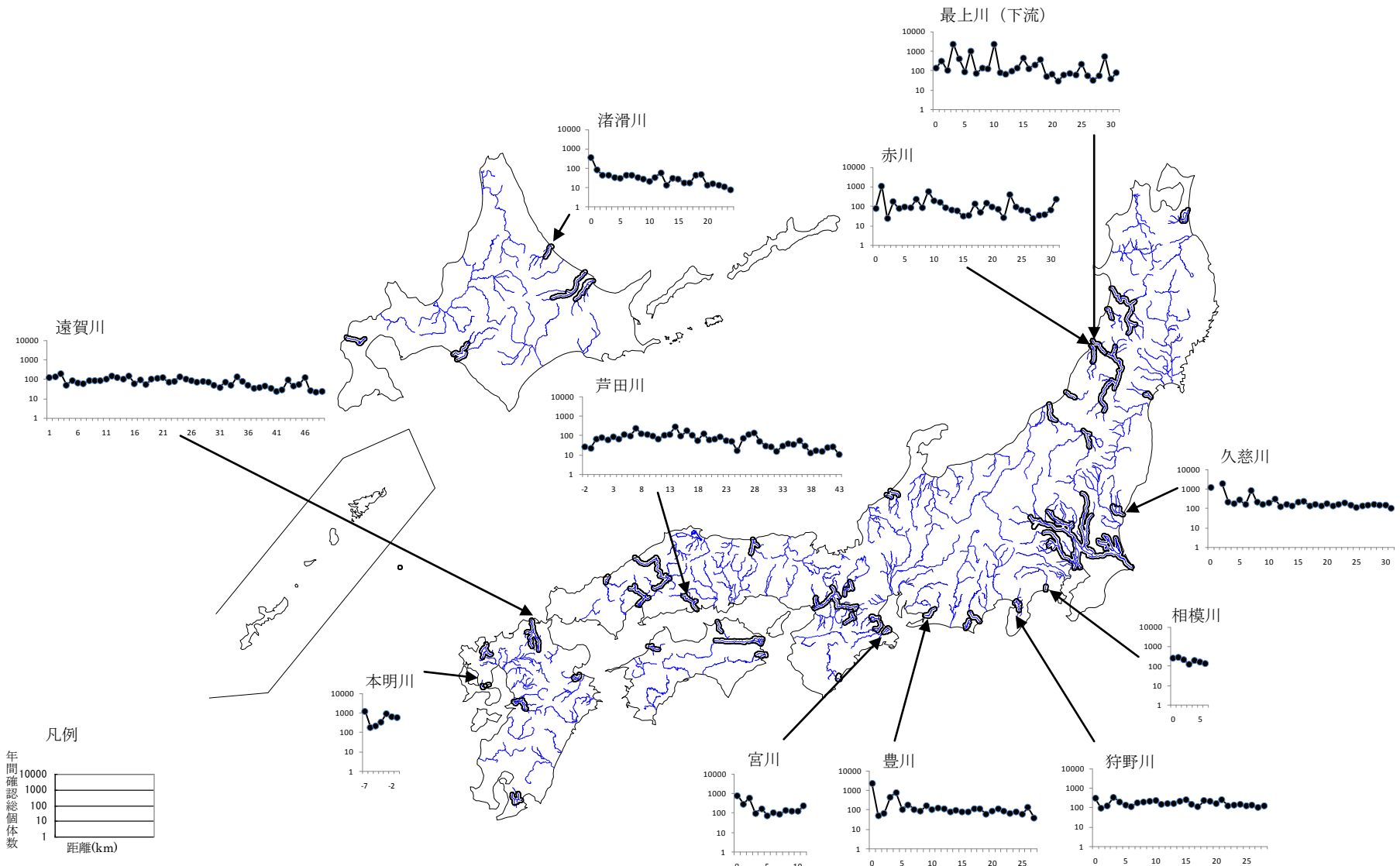
ここでは、鳥類の1kmピッチでの確認種数と、人家周辺指標種(人家周辺を生息環境とする種)、海岸・砂浜指標種(海岸や砂浜を生息環境とする種)や、樹林性指標種(樹林を生息環境とする種)、水辺指標種(水辺を生息環境とする種)、河川流水指標種(河川の流水を生息環境とする種)や静止水面指標種(湖沼などの静止水面を生息環境とする種)など生態的な特徴を指標する種毎の確認個体数を整理しました。また、それらの個体数組成比率を整理しました。

今回とりまとめを行った一級河川11河川では、河口付近では海岸・砂浜指標種が多く確認され、また、人家周辺指標種、樹林性指標種、河川流水指標種や静止水面指標種などの確認状況が、河口から上流にいたるまでの間に刻々と変化していく様子が確認されました。また、北海道の渚滑川、中部地方の豊川、中国地方の芦田川では樹林生指標種、東北地方の最上川、赤川では湖沼静止水面指標種、九州地方の遠賀川では人家周辺指標種の割合が高いスポットが多くみられるなど、河川によってそれぞれ特徴のある鳥類相を示すことが把握できました。これらの特徴は、開放水面の面積や河川敷の植生など河川区域の状況だけではなく、河川周辺の都市や人家、田畑、森林などの状況も関係していると考えられました。

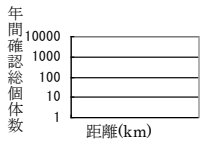
生息環境の指標性は、原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>・<陸鳥編>(保育社)を参考にしました。



鳥類の 1km ピッチの確認種数 (平成 21 年度調査結果)

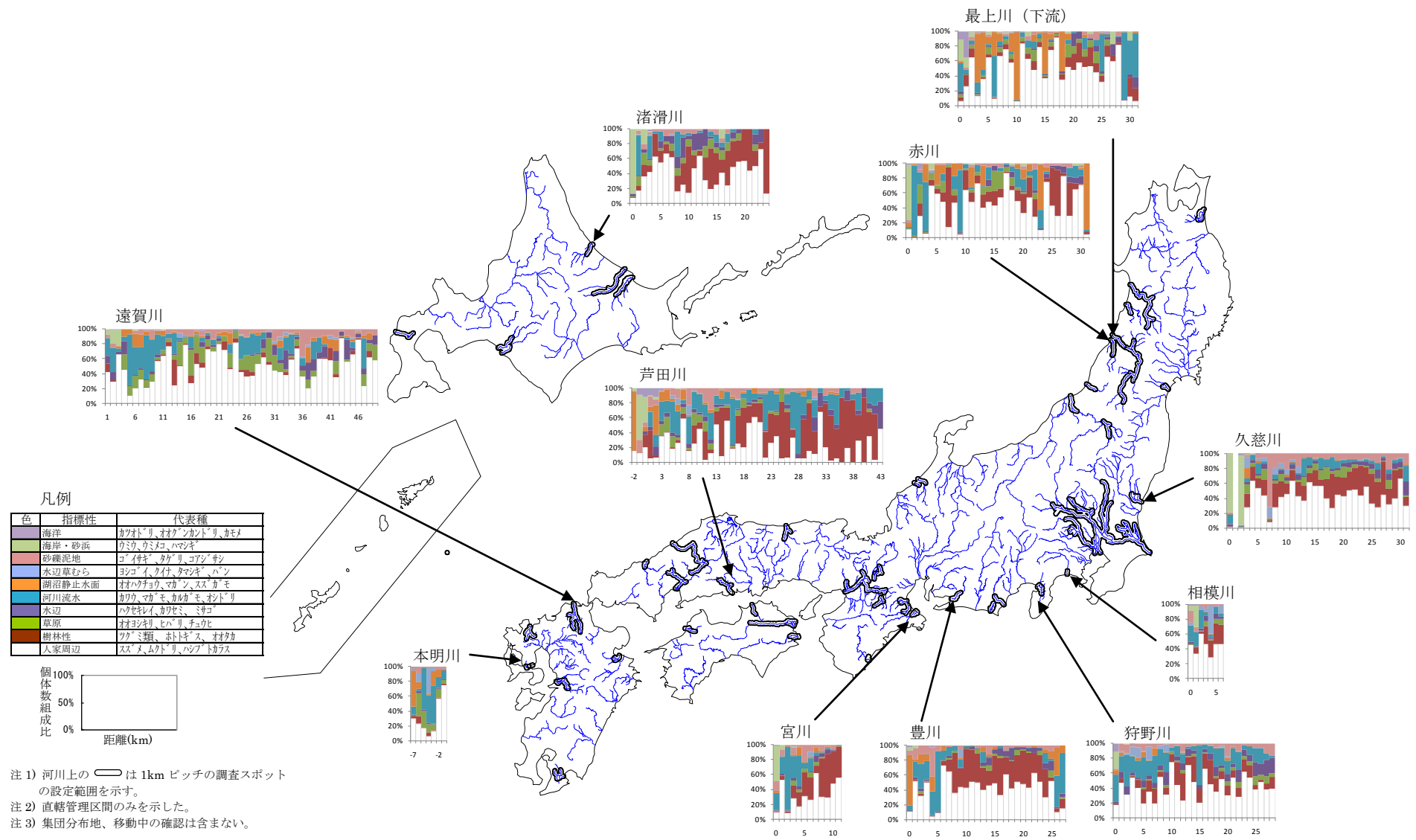


凡例



注1) 河川上の〇は1kmピッチの調査スポットの設定範囲を示す。  
 注2) 直轄管理区間のみを示した。  
 注3) 集団分布地、移動中の確認は含まない。

鳥類の1kmピッチの確認個体数 (平成21年度調査結果)



鳥類の 1km ピッチの確認個体数組成比 (平成 21 年度調査結果)

鳥類の場合、渡り鳥のように自ら大移動を行う種も多くいますが、アヒルなどのように家禽として飼われていたものや、ガビチョウなどのようにペットとして飼われていたものが逃げ出し、野生化して自然界へ広がっている例がみられます。このような国外外来種が生態的に優勢な場合、在来の生物種の生息を圧迫したり、自然界では起こらない交雑によって、地域で保有されていた固有な遺伝子の喪失をもたらしたりすることで、生態系へ様々な影響を与えることが懸念されています。ここでは、河川水辺の国勢調査結果を用いて、特定外来生物の侵入・拡大状況の観点から、特定外来生物に指定されているガビチョウ、ソウシチョウなどの確認状況について整理しました。

**【生物多様性の攪乱：特定外来生物の確認状況】**

(鳥類調査)

- ・ **国外外来種で特定外来生物に指定されているガビチョウを3河川で確認**  
 国外外来種で特定外来生物に指定されているガビチョウ、カオジログビチョウ、カオグログビチョウ、ソウシチョウについて確認状況を整理しました。  
 ガビチョウが関東地方の久慈川、相模川、九州地方の遠賀川で確認されました。  
 (資料掲載：4-22～23、4-38～39 ページ)

1～4巡目調査の確認河川数の比較

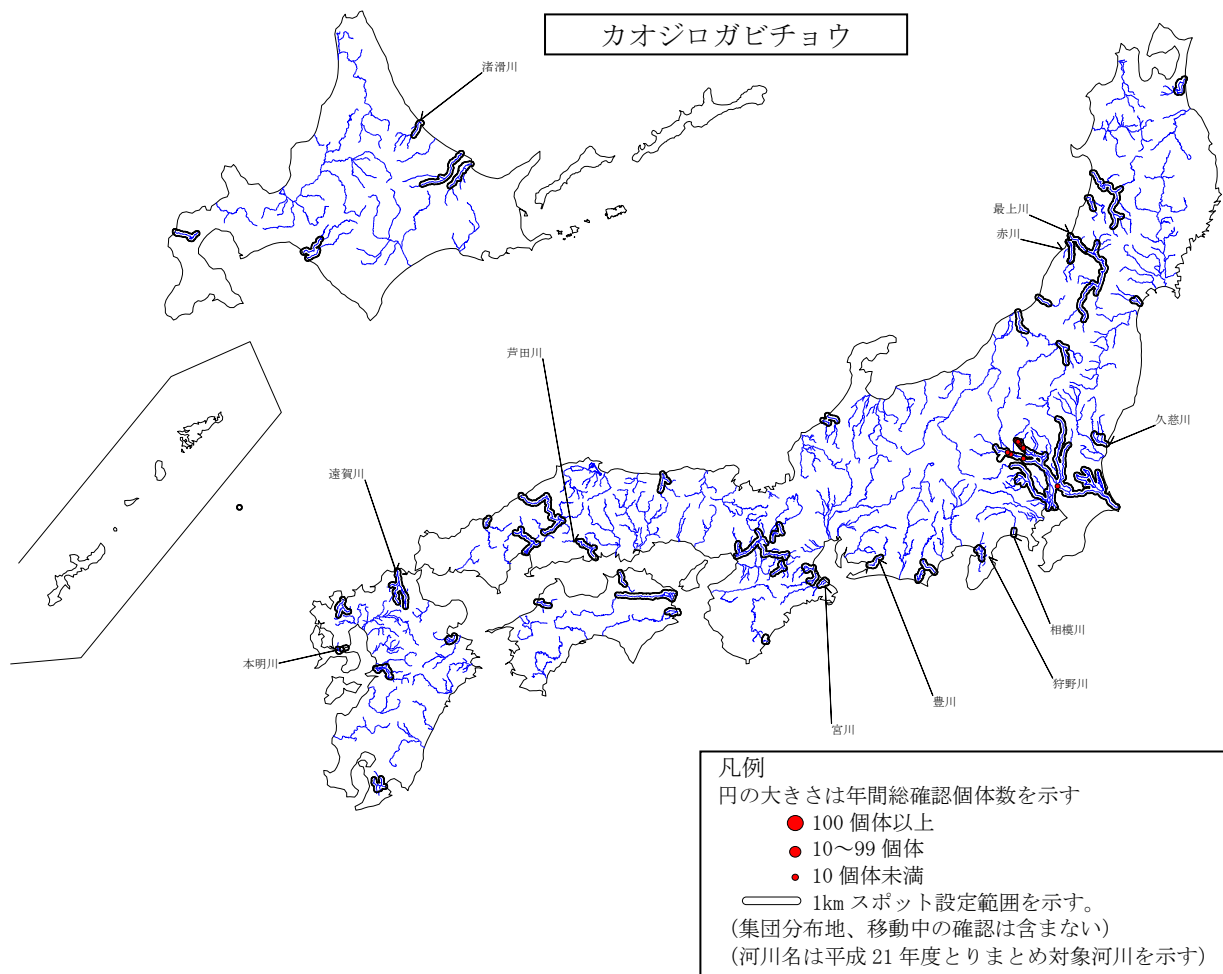
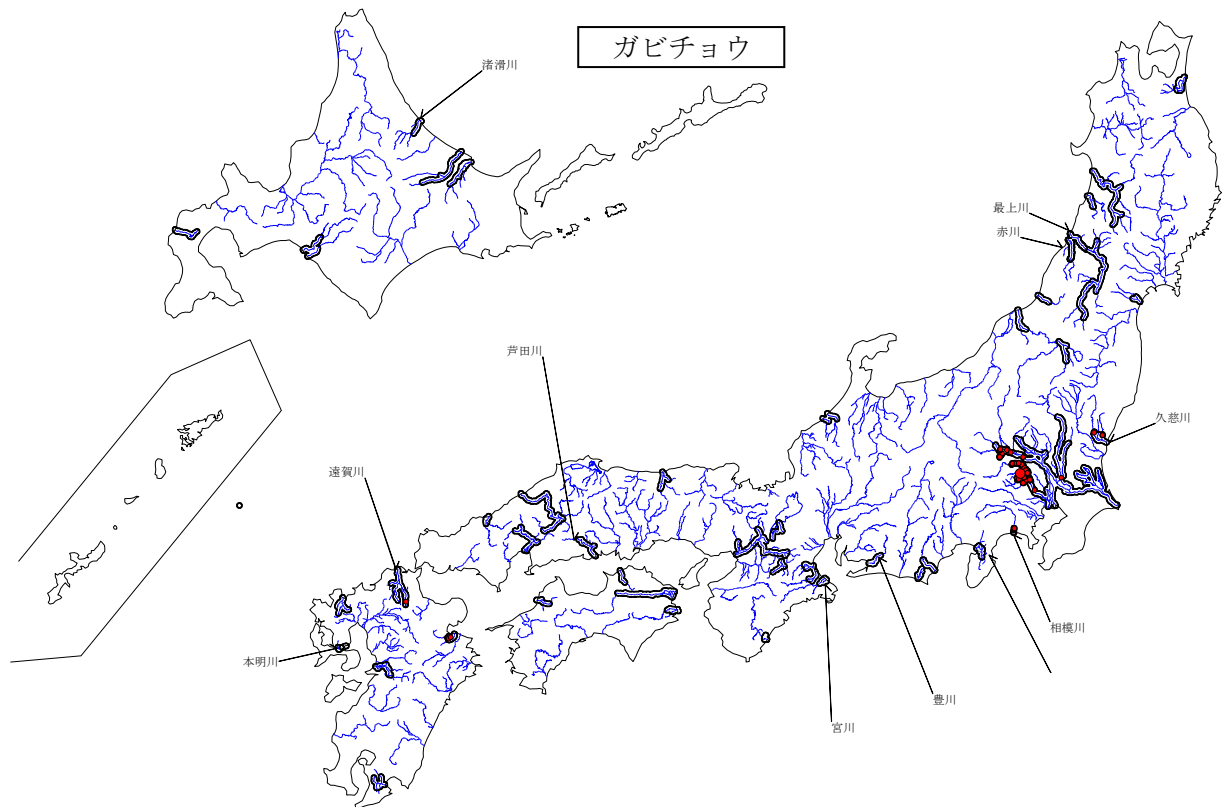
種類	1巡目調査 (81河川)	2巡目調査 (118河川)	3巡目調査 (122河川)	4巡目調査 (56河川)
ガビチョウ	1河川 〔1.2%〕	0河川 〔0.0%〕	8河川 〔6.6%〕	8河川 〔14.3%〕
カオジログビチョウ	0河川 〔0.0%〕	0河川 〔0.0%〕	0河川 〔0.0%〕	2河川 〔3.6%〕
カオグログビチョウ	0河川 〔0.0%〕	2河川 〔1.7%〕	1河川 〔0.8%〕	0河川 〔0.0%〕
ソウシチョウ	0河川 〔0.0%〕	1河川 〔0.8%〕	7河川 〔5.7%〕	6河川 〔10.7%〕

注1) 確認河川数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。  
 注2) 1～3巡目調査のデータは調査実施全河川のうち、種名等について真正化され、河川環境データベースに格納されている調査データを対象とした。  
 注3) ()内は調査実施河川数を示す。  
 注4) []内は確認河川数の調査実施河川数に対する割合(%)を示す。

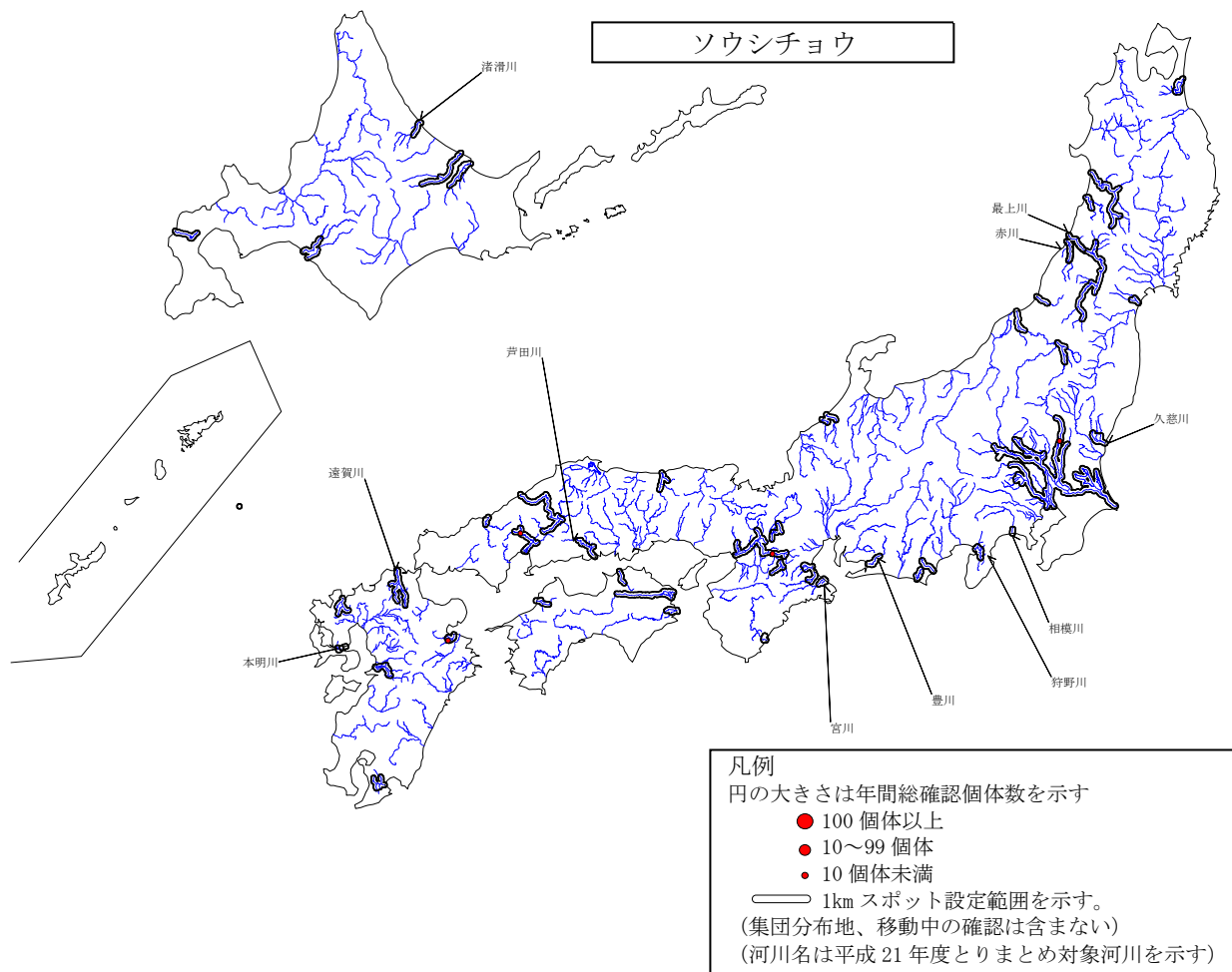
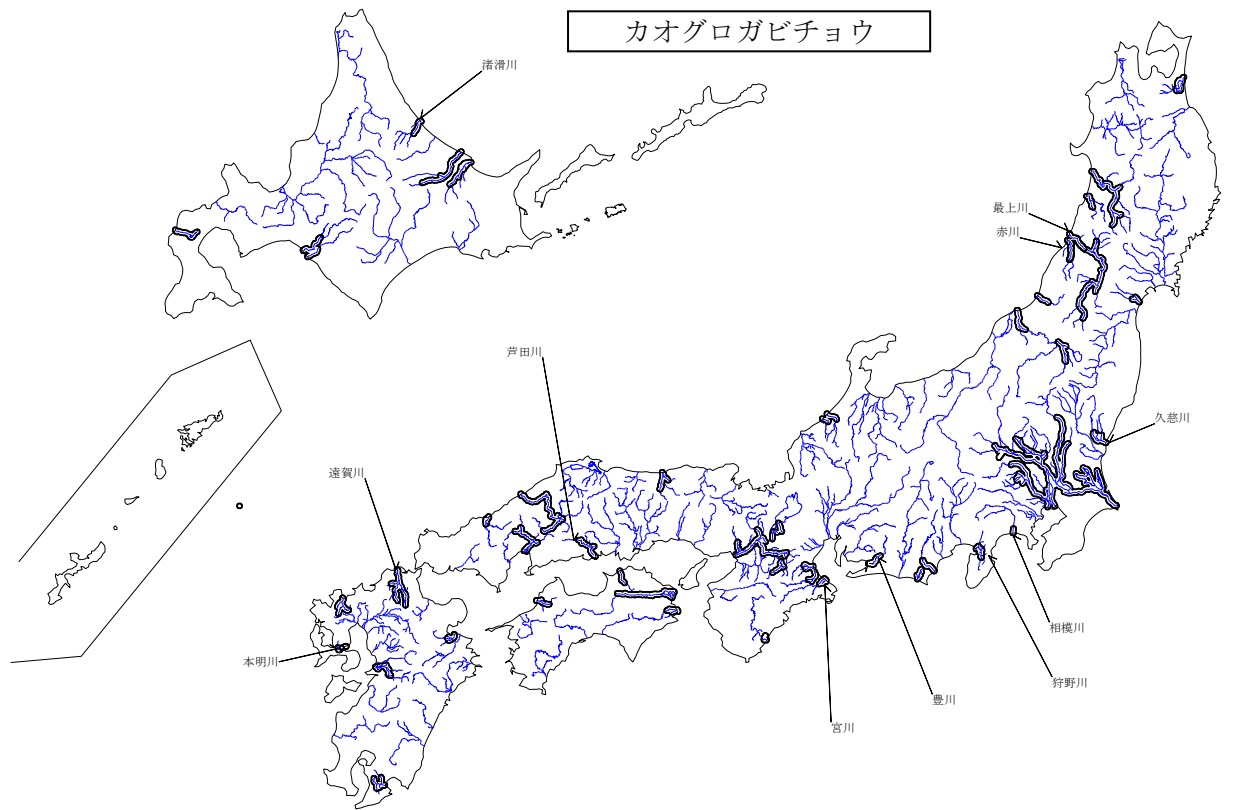
特定外来生物に指定されているガビチョウ、カオジログビチョウ、カオグログビチョウ、ソウシチョウは、いずれも東アジア、東南アジアを原産とする種ですが、主に鳴き声を楽しむためのペットとして輸入されていました。ソウシチョウも、東アジア、東南アジアを原産とする種で、観賞用のほか、伝統的な化粧品であるウグイスの糞の代用品として飼育されていたこともあります。いずれも飼育個体の逃亡ないしは故意の放出が、野外への定着の主因であるとされています。主に低地林に定住し、これらの種が優占しているところもみられ、長期的には在来種への直接・間接の負の影響も懸念されています。今回の調査では、ガビチョウが関東地方の久慈川、相模川、九州地方の遠賀川で確認されました。カオジログビチョウ、カオグログビチョウ、ソウシチョウは確認されませんでした。

1～4巡目調査全体での確認状況を比較すると、今回確認されたガビチョウのほか、カオジログビチョウ、ソウシチョウは3巡目、4巡目調査の調査実施河川数に占める確認された河川数の割合が高くなっていました。

※特定外来生物とは、『特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（2005年6月1日施行）』により、輸入や飼養等が規制されている生物（生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれる）です。おおむね明治以降に国外から導入された国外外来種のうち、生態系、人の生命・身体及び農林水産業へ被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれがある生物が指定されています。



ガビチョウ・カオジロガビチョウの確認スポット（4巡目調査）



カオグロガビチョウ・ソウシチョウの確認スポット（4巡目調査）